

平成二十三年六月一日発行 第二十一卷第六号  
平成二十三年九月十八日第三種郵便物認可  
通巻第二四〇号 毎月一回一日発行

# 槐

かい

平成23年6月号

岡井省二創刊



# 春の海

高橋将夫

結界も縄張りもなし春の海  
根こそぎに奪つて春の海静か  
かの山は笑ひかの川ささやきぬ  
縁先に母が坐れば春きたる

日のもとに三人寄れば春となる  
曲線の多い落書あたたか  
春光に心の屈折率思ふ  
牡丹の芽波乱を秘めてをりにけり  
背後には黒幕がをり春の蝶  
佐保姫の移り香残る密寺かな  
耕せば心にも風通るなり

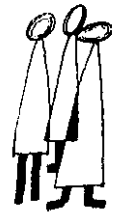
# 槐安集

水野恒彦

鏡面のしらじら匂ふ春の雷  
朧夜の息づくものを八方に  
書を売りし遠き日もあり黄沙降る  
折鶴の鶴の飛び立つ万愚節  
無冠の頭上に八重ざくら咲く

延広禎一

祝一夢見の鐘上梓  
春潮 滔々 夢見の鐘 一打  
檜皮葺にかげろふ立てり酒の神  
春雷の和する釜鳴神事かな  
水軍の砦をはるか鳥の恋  
省二師の句座にぎはへる春の天



加藤みき

八金の面目躍如風光る  
いくたびも眼こすりぬおぼろおぼろ  
わたなかの砂子のさやぎ春の月  
飲食をほめられてをり春の昼  
肩先に金色の粉落椿

石脇みはる

ただにただ白梅の香をたつとびぬ  
花辛夷時の氏神まかりこし  
花の山日向ひゅうがの水の匂ひかな  
まなかひの木の芽田楽イースター  
かな文字のたおやかなりし櫻かな

中島陽華

葬の列松垣の庭の梅の花  
へうげもの真顔なりける亀鳴けり  
相見しと別れと花の宴かな  
春の星鯛の粗炊き骨美しき  
鸞鳴くや海軍島は晴れてをり

竹内悦子

春はももいろ裏山に鳥のこゑ  
枝垂梅牛が見てをる心字池  
まんさくや筑後の村の能舞台  
白梅や六角井戸と坂道と  
空という体の奥の卯月波

栗栖恵通子

東日本関東大震災  
いつさいがつかい地獄の口へ春怒涛  
春やかかの地震踏み絵へ四天王  
原発の六兄弟のかげろへり  
爪あとに泌み込むばかり忘れ雪  
数珠繰つて春の円虹立たせなば

大島翠木

夜の梅に凭れ白狐と話しけり  
啓蟄や手提に肉の一パツク  
重力に脚引つばらる海市かな  
風立ちぬ象の近くのさくらかな  
トルソーの切り口湿る落花かな

雨村敏子

身の内に水流れけり春立てり  
父のこゑ耳朶にありけり西行忌  
山の音海の音して櫻かな  
帯の渦足にまとはる花の冷え  
三月の影つれ歩く花御堂

小形さとる

種選るにいささか大き手なりけり  
呑むほどに醒めて湖北の霧曇り  
掴まれて鶏おとなしき仏生会  
行く処佇む処涅槃西風  
利休の忌ほのかに礁匂ふなり

本多俊子

天空に浮かぶ地球や春炬燵  
春昼や机の上の阿弥陀仏  
山々の木々の精なり春の蝶  
神とても宴ふかまる榛の花  
おほばこの葉を踏みていのちとは何

久津見風牛

啓蟄や小さき地震に耳立てて  
春泥に押し流されし蟻の国  
どもならん地震の畑に芋を植え  
つつがなく地震の中から虫の出づ  
幻日やなきがら尋ぬほほかむり

近藤 きくえ

薄氷のゆらぎ 緋鯉の大喉  
一通の文ゆだねたる 臚の夜  
淡雪や手作りジャムの琥珀色  
川魚の列なしてをり 涅槃西風  
原子炉も地震も鎮まれ 春の雪

近藤 喜子

わたくしの内なる流れ 水草生ふ  
生きてゆく ころのかたち 春の山  
陽炎の果ては 常世の国ならむ  
春蘭や 研ぎ澄まされて きし 五感  
草かんむり外せし 花の化けるかな

谷村 幸子

山の水静かに流れ 貝母咲く  
校倉に 大きな鍵や 春の樟  
春津波なにもかもを奪ひたり  
鳥雲に 無事に 帰るを 祈る 空  
朝夕に 祈る 平穩 桃の花

瀬川 公馨

春霞のラフマニノフの 狂気かな  
瑞垣のむかうまさらの 春の雪  
芹たつぷりの 草鍋を 愉しまむ  
桜東風首を 呼んで ぬたりけり  
さは 菊のクレイが 言ふや 憚り様

久保東海司

平穩に暮るる雛と酌みゐたり  
寝そべりて鹿の半眼山笑ふ  
帰る雁ぶらんこ揺るるまま暮るる  
わが息の梅にふれゐてみくじ結ふ  
盆梅や蒼天に透く昼の月





# 槐市集

竹中一花

畦塗るや若狭の雲を割る光  
懐松本桂子さん  
天翔ける蝶を探してをりにけり  
草餅や幾度も鳴らす金の鈴  
白光は雲の絶間やげんげ咲く  
懐高松孝子さん  
白龍に託してをりし櫻貝

中貞子

鉦の音に朧めきたる仏間かな  
風船を子ら待ちみたる葉売り  
百年もこの世を見たる雛かな  
揚雲雀太極拳をのびやかに  
どの株も思い出ありて菊根分

中島昌子

佐保姫を迎ふ埴輪の笑顔かな  
春眠を貪つてをる無精髭  
色のなき昼の月なり畦青む  
這ひ這ひの子にこぼれくる雛あられ  
男系の家でありけり雛の絵

中田禎子

衝立の達磨の睨み猫の恋  
静寂の戻り白玉椿かな  
桜桃の花みちのくに道の無く  
折鶴を部屋いつぱいに春北斗  
大橋に当る朝日や桜鯛



# 槐集

## 高橋将夫選

春草の香を付け人の世に戻る 岡崎 岩月優美子

春愁の鏡の中の過去未来

フオーヴィスムキュビスム永き日の画集

春光やローランサンの白き肌

シヤガールの宙に浮かるる春の夢

当麻漫茶羅蠟梅の香の中に 枚方 熊川 暁子

紅梅のしだれて木魚たかぶれり

山笑ふ笑ひ仏に向き合うて

おぼろ夜の紐のありかを確かむる

春の風邪光源氏にもらひけり

東風吹くや震災の地へアヴェ・マリア 守口 岩下 芳子

補陀落や一本釣りの桜鯛

桜まじお薬師さまの衣吹く

蹠より人を貫く蘆の角

水煙や飛天の霞まとひたる

蛇穴を出で王道を行きにけり 寝屋川 前田美恵子

春の地震思はぬ神の謀りごと

托鉢の僧の念仏寒戻り

大極殿ゆうに越えたる柳絮かな

鬘の風のワルツよ春立てる

夢告げの鐘が鳴るなり春岬 枚方 中野 京子

くり返す暮らしの匂あたたかし

啓蟄の海にのまるる家田畑

体内も地球の水脈も冴え返る

文明と自然の力陽炎へる

大古より傾ぐ大岩椿落つ 谷岡 尚美

春鹿の近寄つてくる目元かな

国原やたんぼ踏まれても強し

狼の終焉の地や山桜

桃の花蛤御門開かるる

# 銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」照熙

春草の香を付け人の世に戻る 岩月優美子  
野山を歩いて家に戻っただけの景だが、大自然と「人の世」の  
対比が印象的。「草の香」に自然のやさしさを感じる。

春の風邪光源氏にもらひけり 熊川 暁子  
光源氏から風邪をうつされるなんて、なんとご奇特なことぞ。  
なんだか艶っぽい春の風邪ではないか。

東風吹くや震災の地へアヴェ・マリア 岩下 芳子  
アヴェ・マリア。被災した方々に何かしてあげたいという気  
持はみな同じ。

蛇穴を出で王道を行きにけり 前田美恵子  
蛇だからといって邪道に行く必要はさらさら無い。掲句のよ  
うに堂々と王道を行けばよい。

文明と自然の力陽炎へる 中野 京子  
高度な文明も大自然の比ではない。陽炎の様なものだ。完璧の  
防潮堤も津波の前に無力だった。

国原やたんぼ踏まれても強し 谷岡 尚美  
みちのくの震災の大地にもまた、たんぼの咲く日が必ず来る。

光陰や旦過の人の草臙 西村 純太  
旦過は禅宗で行脚僧が一夜の宿泊をすること。永劫の時の流れ  
の中の臙夜の一夜なのだ。

ぜんまいのなにを訝る姿かな 近藤 公子  
薔のあの形は何かをいぶかっている姿だという。なるほど、そ  
うかもしれない。

破顔して蛙に贈る銀の笛 柳川 晋  
「月夜の田圃で鳴る笛は、あれは蛙の銀の笛」の子守唄の世界  
だが、「破顔して贈る」で誹諧の世界へ。

ゆきやなぎ雪をいただきしだれたり 山根 征子  
雪柳に春の雪がうつすらと積もっている景。「雪をいただき  
が美しい。

シヴァ神の大波つれて春のなみ 中田 禎子  
シヴァ神はヒンドゥー教の三神の一つで、破壊の神でもある。  
なるほど、あの地震と津波はシヴァ神がつれてきたのか。

植木市男松女松と並べられ 江島 照美  
アカマツとクロマツが並んでいる植木市の景。男松女松がいか  
にもものどか。

春日向仔牛のやうな犬がゐて 近藤 紀子  
春の日向に大きな犬がある。恐そうだが、仔牛のようだとはいわ  
れると、そうでもないか。(以下略)